

イノベーション・ファインダーズ・キャピタル(IFC) 江藤哲郎

〈寄稿〉「AIの首都」へ変貌するシアトル 世界中から人材、資金が集まる

米国内だけでなく中国からも「AIのシアトル」を目指す動きは急速だ。
迎え撃つアマゾン、マイクロソフトも体制を大幅に強化する。
現地でAIミートアップを主催する江藤氏が、その最新状況を伝える。



シアトルの新名所となった「スフィア」を囲むように立つアマゾンの本社ビル。右側にも中央と同規模のビルがまもなく完成する

地元勢を代表するアマゾンはこの数年、年間1万人を超える採用を続けている。同社は採用した人員を完成したばかりの巨大な新社屋にも収容しきれず、第2の本社を他の都市に設置すると発表。衝撃的なニュースとなったが、全米から誘致を希望する都市が次々と名乗りを上げている。5万人を超えるAI開発者がシアトルに集まっていると言われる。全世界でも他にこのような都市はなく、まさに「AIの首都」だ。それでも人材は足りず、マイクロソフトは2万人のプログラマー全員にマシニング(機械学習)についての教



マイクロソフトが発表している新本社キャンパスの構想図。中央に広大なクレーン場などを設けるのも人材確保のため

育を始めた。また同社は、シアトル近郊のレドモンドにある本社の新たな造成計画を発表した。125もの建物がある敷地内で低層階のビルを全て取り壊し、5万人収容のビル群と1万人が集える広場を建設する。シアトルのAIスタートアップと日本企業を結び付ける

シアトルのAIスタートアップと日本企業を結び付ける

地球規模で人材を引き寄せ、研究機関や企業に取り込み新たな価値の創造を目指す。その中から起業したスタートアップ企業はグローバル展開を目指し、それがまた人材を呼ぶ。シアトルのAIイノベーション

シリコンバレーや中国から人や企業が続々流入

人の流れと共に大手企業の拠点開設も加速している。既にシリコンバレーからはグーグル、フェイスブック、セールスフォースがシアトルにAI研究開発拠点を設け、

ワシントン州は名だたるグローバル企業が多く本拠地を置いている。ジェイ・インズリー州知事の「ボーイング、マイクロソフト、アマゾン等で培ったBoB(ビジネス)をもっと日本に輸出する」という大方針のもと、州政府商務局は日本企業誘致や事業提携に極めて積極的だ。シアトルとその近郊は約10万人の日本人・日系人コミュニティがあり、日本企業とビジネスをして当たり前という認識もある。

人と技術と資本が集約されたシリコンバレーは、世界のIT産業の中心と言っている。ただし近年は沸騰状態にあり、物価や地価はうなぎ登り。人材確保のための引き抜き合戦は過熱している。一方、シアトルはまだ成長カーブの端緒にある。第2のシリコンバレーを目指す他の都市との競争があるが、シアトルは環境の良さ、食べ物の美味しさ、多様な文化などの魅力があり「グオリティ・オブ・ライフ」を求める人々と企業が全米から集まっている。

最大で4000人規模のビルを準備している。アップルは2016年に、シアトルのAIスタートアップ企業「Ene」を買収した。中国勢は百度、アリババ、テンセントのいわゆるBAT3社が同じくスタートアップ企業を買収するなどの形で進出。過去3年間で100社以上のグローバル企業がシアトルに開発拠点を開設した。



今年7月にシアトルで開催された、「ジャパン・シアトル AIイノベーション・ミートアップ」(IFC主催)の参加者たち。シアトルのAI関連企業や日本の大手企業が多数参加した。左下が江藤氏



執筆者紹介

(えとう・てつろう) 鹿児島県生まれ。1984年慶應義塾大学商学部卒業。同年、株式会社アスキー入社。86年、マイクロソフト株式会社設立に参加。92年、株式会社電通入社、デジタル・コンテンツの開発とビジネス化を推進。情報システム局などを経て2013年から経営企画局専任局長。15年7月、ワシントン州カークランドにInnovation Finders Capitalを設立。

下の写真提供/江藤哲郎氏

右の写真/Suzi Pratt 左の写真提供/江藤哲郎氏